

自分軸を育み、他者とよりよく生きようとする児童の育成

～道徳科における対話を通して～

八重瀬町立新城小学校教諭 屋比久 咲

I テーマ設定の理由

VUCA 時代（予測困難な時代）を生き抜き、正解が一つに絞れない問いに、試行錯誤しながらも最適解・最善解を求め続ける粘り強さを持った児童生徒の育成が求められている。沖縄県では、学びの質を高める授業改善と、自ら学びを進めることができる「自立した学習者」の育成を方針の中核に据えている。その方針のもと、学習者が主体的に学ぶ姿の実現が目指されており、その一つの有効な手立てとして「対話活動」の活用が挙げられる。対話を通して児童は、当事者意識を持ちながら他者と意見を交わし、多様な価値観に触れることによって、自らの考えを深めていくことができる。また、その中で他者とよりよく生きる術を身に付けることも期待される。

「道徳教育は学校の教育活動全体を通じて行うもの」とされているように、児童の心の成長は教科学習に限らず、学校生活全体を通して促されるものである。心の成長はあくまで自己の内面で生まれる変化であるが、それは決して自己完結的なものではなく、他者との関わりによってこそ醸成される。『学習指導要領 第3章 特別の教科 道徳』の目標にも、「道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して道徳性を養う」と明記されている。

こうした理念のもと、新城小学校では道徳科の授業を要としながら、児童が対話を通じて主体的に学ぶ姿の実現を目指してきた。これまでの実践を振り返ると、発問構成や板書、教具の工夫などにより、授業の焦点を明確にしたシンプルでわかりやすい授業構成を心がけてきた。特に、本校では「聴いて・考えて・動く」という学校全体の共通目標を掲げ、「よく聴く」姿勢を日常的に意識できるよう、継続的な指導を行っている。相互に話を聴き合い、発言を受け止める温かい学級・学校の雰囲気が醸成されつつあり、自分の考えを素直に表現できる児童が増えてきていると感じる。それを意識して教師は、ファシリテーターとして児童の発言をつなぎ、広げ、深めていくことによって、児童同士の対話を充実させ、児童主体の授業展開を目指している。

令和6年度に実施した本校の「道徳科児童アンケート」によると、「対話」に関する問いに対して「話し合うことは楽しいし、参考になる」と答えた児童が多く見られた。一方で、「みんなの前では話し合うのは難しい」と感じる児童が、高学年に顕著に見られた。このことから、全体での話し合いだけでなく、小集団での対話活動の在り方についても、より一層の工夫が必要だと考えられる。また、他者の考えに耳を傾け、比較しながら自己と向き合う「自己内対話」の力を育み、他者とよりよく生きようとする児童の育成を目指していきたい。

本研究では、対話を手がかりとして、多面的・多角的に思考し、自らの考えを深めながら他者と関わる力を育成することを目的とし、本テーマを設定した。

II 研究の目標

道徳科の授業において、協働的な対話を通して、児童が自分自身と向き合いながら自分軸を育み、他者とよりよく生きようとする児童を育成するための実践研究を行う。

Ⅲ 研究の方法

これまでの授業やアンケート調査等から、児童の実態調査・分析・把握を行う。実践研究は、5年生の2学級で計8時間行う。授業では、対話を通して児童らが多面的・多角的に思考を深め、自分事として考える時間を設定する。また、教師はファシリテーター（伴走者）として対話に参加していく。授業の様子や児童の発言、対話活動の様子、ノートの記述等は授業ごとに考察する。このような実践を積み重ね、検証授業終了後は、実践研究として本研究の内容を検証しまとめる。

表1 検証計画

月日	内容	主な検証の観点と方法
5/29	児童の実態把握のため担任授業参観、事前打ち合わせ	授業参観
6/3 6/5	事前アンケート実施、道徳授業オリエンテーション	実態の把握 学習の流れを確認
6/5	⑥ペンギンは水の中を飛ぶ鳥だ【A 希望と勇気，努力と強い意志】	【検証の観点】教師は、授業をファシリテートし、発問や問い返しを工夫する。児童が対話を通して多様な思考に触れ、自分軸を育むことができたか振り返りで見取る。
6/12	⑧心のレシーブ【B 友情，信頼】	
6/19	⑪共有しちゃえ【A 自由と責任】⑮流行おくれ【A 節度，節制】	
6/26 検証Ⅰ	⑪共有しちゃえ（指導講師、研究所）	【検証方法】授業観察（発言・態度等）、ノート（振り返り）、授業記録（写真・ビデオ等）
7/3 検証Ⅱ	⑮流行おくれ（新城小校内公開）	
7/4	事後アンケート	事前との比較、児童の感想
7/16 検証Ⅲ	第2学年 ⑫さかあがりできたよ【A 希望と勇気，努力と強い意志】	【検証方法】授業観察、ノート、授業記録

Ⅳ 研究内容

Ⅰ 特別の教科道徳について

道徳科の目標は、第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳性を養うことと示されている。この文章の前半は、道徳科で育てるべき目的、後半は道徳科に求められる学習活動（手段）が示されている。

（目的）よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため

（手段）道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳性を養う

この道徳科の目標を言葉ごとに分けて整理する。

(1) よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う

「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」とは、道徳教育の目標にある文言と統一されている。道徳性とは、『小・中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科道徳編』において、道徳的判断力、道徳的心情、道徳の実践意欲、道徳的態度という 4 つの観点で捉えている。これらは、道徳性を構成する諸様相と言われており、授業を構成する際には、ねらいとする諸様相を明確にして構成していくことが大切であると考ええる。

(2) 道徳的諸価値について理解する

道徳的諸価値を理解するとは、人間としてよりよく生きる上で大切なことであるという理解（価値理解）、道徳的価値は大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなどの理解（人間理解）、道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考え方は一つではない、多様であるという理解（他者理解）を意味している。児童らが今後、様々な問題場面に出合った際に、その状況に応じて自己の生き方を考え、主体的な判断に基づいて道徳的实践を行うためには、道徳的価値の意義及びその大切さの理解が必要になるということである。授業では、児童が道徳的諸価値について「教えられる」のではなく、「意味づける」経験を重視する。物語教材や日常の出来事を通して価値に触れ、「なぜ大切か」「どんなときに生かされるか」を自分の言葉で語る活動を設定していきたい。

(3) 自己を見つめる

自己を見つめるとは、児童一人一人が自分との関わり、つまりこれまでの自分の経験やそのときの感じ方、考え方と照らし合わせながら、更に考えを深めることである。このような学習を通して、児童一人一人は、道徳的価値の理解と同時に自己理解を深めることになる。また児童自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見つけたりすることができるようになる。授業では、登場人物の気持ちと自分の体験を重ねることで「自分だったらどうするか」を考える機会をつくり、児童が「自分らしさ」や「なりたい自分」について語れるような振り返りや対話の場を設定するなど、授業を構成していきたい。

(4) 物事を多面的・多角的に考える

「物事を（広い視野から）多面的・多角的に考える」とは、物事を一面的に捉えるのではなく、児童自らが道徳的価値の理解を基に考え、様々な視点から物事を理解し、主体的に学習に取り組むことである。「自分の考え」だけでなく、「他者の考え」や「立場の違い」にも目を向けて、広く深く考える力を養っていく。登場人物の立場をロールプレイで体験したり、賛否が分かれる問いに対し、複数の視点から考える工夫として板書等を活用したりする。児童同士の意見交換を通して思考を広げる活動を設定していきたい。

(5) 自己の生き方についての考えを深め、他者とよりよく生きようとする

「自己の生き方についての考えを深める」とは、道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考えるという道徳的価値の自覚を深める過程を通して、そこで形成された道徳的価値観を基盤として考えを深めていくことである。小学校では、自分の特徴を知ったり、伸ばしたい自己を深く見つめたりできるようにする。それとともに、自己の生き方として「自分はどうかいたい」「これからどう生きるか」を深く考え、実現していこうと

する思いや願いを深めていく。授業では、対話を通して得た気づきを、今後の自分の行動や生き方に結びつけられるようにし、納得解を言葉にしたり、思いや願いをノートに綴れるようにしていく。振り返りノートから他者とよりよく生きようとする児童の姿が伺えることを期待している。

2 対話で育む自分軸について

永田²によると、「自分軸とは、自己の価値観や意志を大事にし、自らの主体的な選択に自信をもち、自分なりに納得する生き方や人生を生み出そうとする心の中心的な力（軸）となるもの」と示されている（図1）。

浅見³は「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うためには、子供が多様な感じ方や考え方に接することが大切であり、子供が多様な価値観の存在を前提にして、他者と対話したり協働したりしながら、物事をより広い視野から多面的・多角的に考え、子供一人一人は、価値理解と同時に人間理解や他者理解を深め、更に自分で考えを深め、判断し、表現する力などを育むのである」と述べている。

授業では、「自己との対話」や「他者との対話」が自然に生まれるような工夫を行い、児童が他者の意見を尊重しながら受け止め、自分の考えを見直し、納得解を導いていけるようにしていく（図2）。そして納得解を導いた後、自分軸を育てていく。

他者との対話を通して、自分の考えと他者との考えとを交流させることで自己の考えを深め、自己の生き方に納得し、自分軸を持って生きることができるようになってくると考える。授業では対話活動を取り入れ、自己との対話や他者との対話が自然に生まれるよう工夫したい。

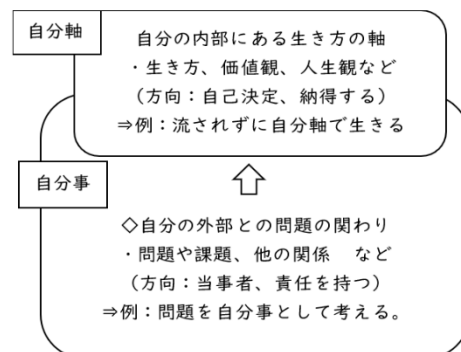


図1 自分軸と自分事との関係（永田を参考に作成）



図2 納得解を生み出すイメージ

(1) 対話につなぐ発問構成

和井内⁴によれば、「子供自らが考え、主体的に学習に取り組むようにするためには、子供が考えてみたくなる発問、つまり、子供が問題意識を持って『なぜだろう、どうしてだろう』と思考する発問を工夫することが求められる」と述べている。また、山田⁵は、「中心発問は『確認と整理のための発問』であり、教材の中の主人公の心情や考えを考えたり、言動の意味や理由を考える『読み取り』という活動の一部である。」と述べている。

このことから、中心発問だけでは価値を深めるにはまだ弱く、児童が問題意識を持って対話を生み出すためには、児童から問いが生まれるような発問の工夫が重要と考える。

そこで、中心発問で出た児童の意見を十分受け止めた後に、「なぜそう考えたのか」など、根拠を問う発問の問い返しを行っていく。そうすることで児童の中に問いが生まれ、道徳的価値に対する理解が深まるのではないかと考える。深い価値理解を促すため、発問構成を工夫し、自分自身と向き合い、他者とよりよく生きようとする児童を育成していきたい。

(2) 対話を促すファシリテーション

掘⁶は、「生徒が問題意識をもって学習に臨み、ねらいとする道徳的価値を追求し、多様な感じ方や考え方によって学ぶことができるようにするためには、指導方法の工夫が大切である」と述べている。指導方法の工夫として、対話ができる雰囲気づくり、教師の反応する力、

構造的な板書力が重要であると考える。

① 対話ができる雰囲気づくり

教師は、授業の先導者ではなく、伴走者としての心構えで本気の話し合いを目指していく。堀によると、「本気の話し合いを目指すには、ファシリテーターが本気になることが重要である。ファシリテーターには場の安全を担保する、発言を平等に扱う、多様性を大切にするといった役目がある。また、一人の人間として誠実に相手に向き合うこともポイントとなる。飾らず、繕わず、常に自然体で児童と接する態度で、本気で対話するムードを創り出すことが重要となってくる。」と述べられている。伴走者としての心構えを持ち、授業をファシリテートしていきたい。伴走者としての心構えについて、永田を参考に道徳の言葉に置き換えて作成した(図3)。

【伴走者の心構え】

- ・ ポジティブな声掛けを心掛ける。
- ・ 言いたいことが言える雰囲気をつくる。
- ・ 児童の話し方や理解の速さにペースを合わせる。
- ・ 子どもの思いに寄り添って話を聞く。
- ・ 前に出て引っ張るようなことは避ける。
- ・ 信頼して対話してもらう環境をつくる。

図3 永田繁雄 『子どもの「伴走者」に徹する授業をつくる』を参考に作成

② 教師の反応する力

話し合いでは、教師がファシリテーター役として児童の考えをつないでいくことを心掛ける。児童の発言に傾聴し、タイミングを見計らって介入していく。児童の反応から生まれる発問を構成し、児童の言葉でつなぎ児童主体の対話を目指していく。教師の介入は最小限になるよう意図的に配慮し、授業をファシリテートしていきたい。

③ 構造的な板書力

対話の授業で教師に求められるものは、児童の考えをいかに分かりやすく黒板に整理しながら示すかということである。児童が自分の考えの位置を確かめるとともに、友達との相違に気付き、それらと比較しながら視野を広げ、さらに考えが深められるような板書の工夫をすることで、多面的・多角的な考えを自己の生き方に活かしていく手掛かりになっていくのではないかと考えている。

V 本検証授業

I 検証授業 I 対象：5年1組

(1) 主題名「生活を見直す」【A 節度、節制】

(2) 教材名「流行おくれ」(「新編 新しい道徳5」東京書籍)

(3) 本時の学習

① ねらい

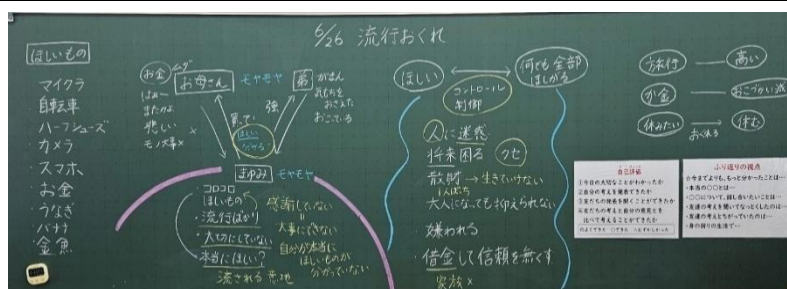
登場人物の姿や思いについて話し合うことを通して、自分の生活も見直し、毎日の生活の中で節度を守り節制に心掛けようとする実践意欲を育てる。

② 学習指導過程

過程	学習活動○主な発問◎中心発問・予想される児童の反応●問い返し	○指導上の留意点 ☆評価の視点
導入 5分	1. 今、欲しいモノについて話し合う。 ○今、欲しいものはありますか？ どうやって手に入れますか。 ・ゲーム機 ・洋服 ・パソコン ・本	○ねらいとする道徳的価値への方向付けをするために、今ほしいものについて考える。(口頭)

展開 25分	2. 教材について感想を話し合う。 ○教材を読んで考えたことを伝え合おう。 ・わがままだな。 ・新しい服を買うのはもったいない。 ・部屋が汚いから物を無くすんだ。 ・整理整頓した方がいい。 ・自分も同じ経験があります。自分も我慢しようと思いました。 ・お母さんも弟も困っている。 ○まゆみさんの何が問題なのですか。 ・自分の欲望のままに行動している。 ・周りの人のことを考えていない。自分勝手。 ◎物を欲しがるのはいけないことなのでしょうか。 ・ほしいと思うのはいいけど・・・ - 全部を買ってほしいと言すぎるのはよくないと思う。 ・必要な物だったらいいと思うけど。 ●手に入れたいものは全て手に入れた方がいいんじゃないですか。 ・周りが困ってしまう。・お金は無限ではない。 ・なんでも取り入れてしまって、物の有難みを知らない。 ・だから、自分をコントロールしないとイケない。 ☆自分の生活についても考える。 ○こうしたいけど我慢しないとイケない場面は買うこと以外にもありますか？生活の中でもっとありますか？どんなことですか？ ・(ゲーム/眠る)、(遊びたい/宿題)、(遊びたい/掃除)	○教材を読んで思ったことを話し、伝え合わせる。 ○同時に板書し場面整理を行う。 ○基本発問により、主人公に焦点化し、価値理解へとつなげる。 ○児童の発言に応じて、意図的な問いかけを行う。 ○「分かっているけれど、やめられない」という人間の弱い部分(人間理解)を認めながらも、自分を客観的に見つめ、「自分との闘い」に負けない自分を自覚できるようにさせる。(発言、多面的・多角的思考の深まり) ○児童の発言に応じて、意図的な問いかけを行う。 ☆自分の欲望を制御し、程よく生活をする場面を振り返り、自分事として考える。
終末 5分	3. 学習の振り返り ・これからは自分の思いだけではなく、家族とか周りの人のことを考えて行動していきたいと思いました。 ・我慢するのは苦しいけど必要な時もあるから頑張っていきたい。	☆本時の学習を振り返り、自分の生活を見直し、これからよりよい生活を送るために大切なことは何かを考えている。(ノート)

③授業に関する評価の観点 ○節度・節制することについて多面的・多角的に考えているか。(発言) ○自分の生活を振り返って生活を見直すことについて自分軸で考えていたか。(ノート)
--



VI 実践のまとめ

I 多様な思考に触れる対話

授業では対話の時間を多く取り入れ、教材範読後の感想交流や基本発問、中心場面で自己との対話・他者との対話を行った。全体で話し合う前に3~4人の小グループで対話することで、児童は互いに聴き合いながら自分の考えを伝えていく(図4)。小グループでの話し合いを



図4 小グループで対話している様子

通じて考えを整理し、全体で共有することで多様な価値観に触れ、思考の深まりが見られる。
また、児童同士が顔を見合えるよう座席を工夫し、対話しやすい環境を整えた。実際の対話を聞き取る為、小集団グループごとや全体での対話を記録した。

A1	「俺もさ、これさお母さんに言われたことあるよ。買ってもらえるのが当たり前だと思っているんだよね。買ってもらっているのに感謝してないんじゃないかな。」
A2	「あー、なるほど。感謝が足りないんだね。」
A3	「確かにねー。」
【A】小集団グループでの対話	

小集団グループでの対話では、自然とお喋り口調になっており、お互いに気楽に話ができていた様子であった。

B1	「お金を使いすぎて、周りに嫌われるんじゃないかな。」
B2	「お母さんにほしいほしいって言って将来使いすぎて、知り合いからお金貸してって。」
B3	「あー悪い方に全部いくってことかー。」
複数「うわー。」	
B4	「周りから人が居なくなりそう。」
B5	「散財したら周りから人が居なくなって最終的には一人になっちゃう。」
【B】全体交流内での対話	

全体での対話では、小集団で整理された考えを発表しながら交流し、更に多様な思考に触れる機会となっていた。それぞれのグループで話し合われたことが繋がり、思考を深めていく様子が見られた。

2 思考や対話を生みつなぐ発問構成

本実践では、児童から問いが生まれるような発問を構成することを意識した。発問の意図や児童の反応、発問の妥当性について表に整理して考察していく。

表2 発問構成の考察

	発問	意図	児童の反応	妥当性・考察
①	感想 「感想交流をどうぞ」	場面整理をしながら児童の率直な感想を引き出し、基本発問になる言葉を探す。	主人公のまゆみ、弟、母に対してそれぞれの立場で考え内容を捉えていた。	児童の率直な感想が出ると同時に場面整理ができたので妥当である。また児童の感想を基に次の発問へとつなげていた。
②	基本発問 「まゆみさんは何が問題なのでしょう」	まゆみに焦点化して、価値に触れさせる。	物欲に関する反応が多い。	節度節制の価値には触れているが、物欲に関しての意見が多く多面的・多角的には触れられていない。
③	中心発問 「物を欲しいと思うのは良いことだが、何がいけないのでしょうか」	小集団で話し合うことで自分の考えを深める。 全体で交流し、多様な考えに触れる。	口々に相談し始めた。いいことなんだけど・・・続きを上手く言語化できていない。自分の生活に照らし合わせながら自分事として考えていた。	価値を追究し始める児童の姿から、中心発問としては妥当。物欲以外の感情のコントロール、金銭感覚、整理整頓などの節度節制に関する価値が多面的に表されていた。
④	生活に振り返る基本発問 「生活の中で買うこと以外に感情をコントロールしたり、我慢したりする場面はどんなことがありますか。」	教材から離れ自分の生活と関連させ、自分軸を育む。	反応が薄かった。 「えーなんだろう。」 「何かある？」 「うーん、旅行とか？」	具体的に場面をイメージさせる発問がよかった。例えば「このクラスにもゲームをしている子がいたよね」といった場面提示があれば、自分の生活との関連で考えやすくなるだろう。

以上のことから、場面整理からまゆみさんへの焦点化、中心発問で多面的・多角的な思考、自分事として考えるという発問構成ができた。発問一つで児童の思考は深まり、自分の生き方を見つめ直すきっかけとなる。深い価値理解を促すための発問構成の重要性を改めて実感した。

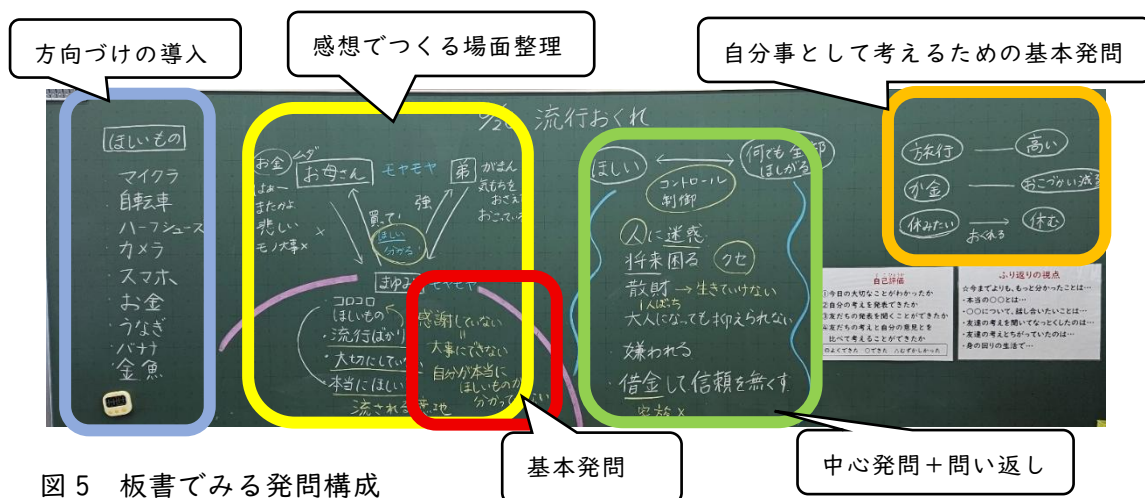


図5 板書でみる発問構成

3 対話の児童アンケートの結果

アンケート結果では、「みんなで話し合うことについてどう思うか（図6）」という設問に対し、「自分とは違うけど、どの考えもいいなと思う」と答えた児童が、51.6%から66.7%で14.9ポイント上昇した。

また、「自分と違う意見が出たとき、どうすることが多いか（図7）」という問いに対し、「違う意見の人の話をもっと聞く」と「どちらの意見も考えてみる」が授業前後でいずれも高い割合を示した。これらの結果から、児童たちは多様な意見に触れ、「もっと知りたい」と感じたり、異なる考えを受け止めようとする姿勢が育まれていることが分かる。一方、「自分の考えをもう一度言う（図7）」と回答した児童は、5.2%から9.1%へと3.9ポイント上昇し、自分の意見を伝えようとする姿勢も見られた。これは、相手の考えを大切に聴くとともに、自分の意見にも価値があると捉え、自信を持って伝えようとする意識の表れと考えられる。

さらに、「自分が話したことについて、他の人が『それはいいね』『〇〇さんの考え、面白いね』と言ってくれたらどう思うか（図8）」という設問に対しては、「安心する」が59.0%→71.2%、「うれしい」が68.9%→72.7%といずれも上昇し、7割を超えた。このことから、児童が安心して気持ちよく話せる雰囲気

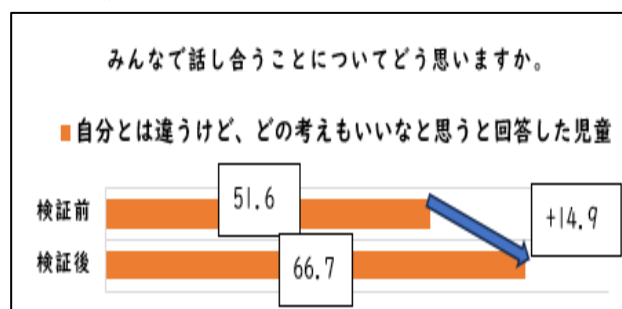


図6 検証授業前後の児童アンケート結果比較

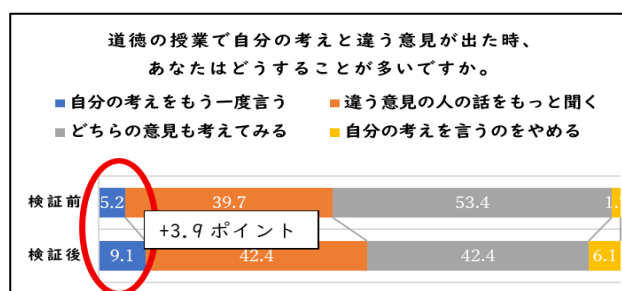


図7 検証授業前後の児童アンケート結果比較

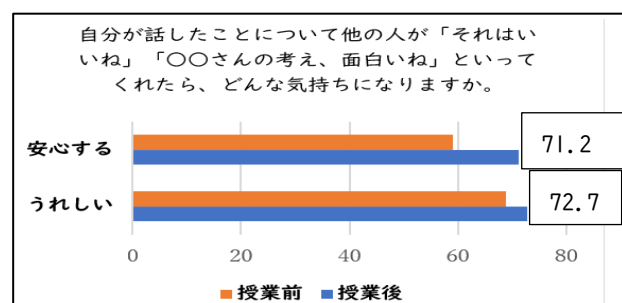


図8 検証授業前後の児童アンケート結果比較

の中で、自他の意見を尊重しながら対話を進める姿が見られ、他者とよりよく生きようとする力が育まれていると考察できる。

事後アンケートにおいて、「座り方について、お互いの顔が見えるように座ることで、これまでと話しやすさに変化がありましたか」と尋ねたところ、「これまでと変わらない」(18%)との回答も見られたが、「顔が見えて話しやすくなった」(63.3%)、「話しやすい雰囲気になった」(56.1%)といった肯定的な回答が多数を占めた。この結果から、対話のしやすさを高める手立てとして、互いの顔が見える座席配置は有効であると考えられる(図9・図10)。今後は、児童の実態に応じて多様な配置に取り組み、より適した形を模索していきたい。また、「話し合いをもっと楽しくするには?」という設問に対し、「他のグループとも交流したい」という意見が挙がったことから、児童が話す相手を自ら選べるような場の設定も有効であると捉えた。

これらの対話における工夫を通じて、児童による多様な意見の交流が促され、自分軸を育みながら他者とよりよく関わろうとする児童の姿が確認できた。



図9 座席の工夫

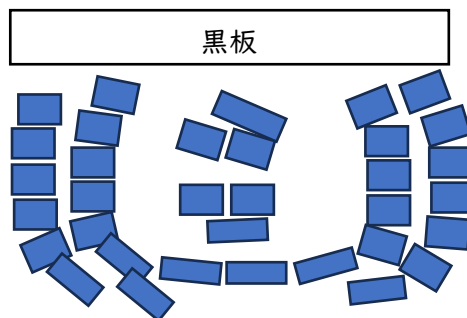


図10 上から見た

座席配置のイメージ

4 教師のファシリテーションで高める児童の主体性

本実践では、児童が主体的に対話へ参加し、他者とよりよく関わろうとする姿の育成を目指し、教師の介入を最小限に抑えたファシリテーションを行った。対話は常に流動的であり、形式にとらわれず展開するため、教師は児童の発言を丁寧に聴き取りながら、適切なタイミングで必要な支援を行うことを意識した。児童の言葉を活用して対話をつなぎ、話し合いの中心に児童自身が立つことを重視した。

授業後に45分間の授業映像を分析した結果、教師の発言時間は8分34秒、児童の発言時間は22分25秒、記述時間は7分30秒であった。発言時間の割合からも、教師の発言は19%で最小限に留まり、66.5%という大部分を児童が主となり対話を構築していたことが客観的に確認できた(図11)。

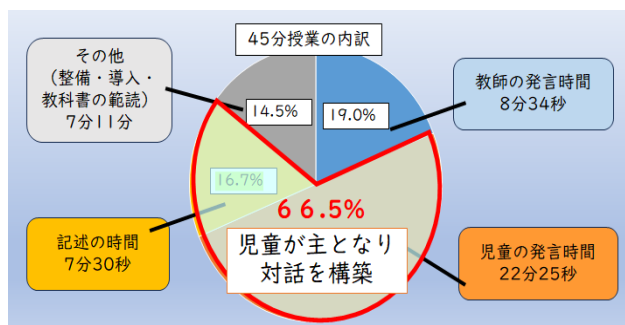


図11 時間でみる児童主体の授業

また、教師は「伴走者」として、対話がしやすい雰囲気づくりにも力を入れた。事前オリエンテーションや初回授業では、「よく聴くこと」「反応すること」の大切さを共有し、対話の意義について確認した(図12)。児童も前向きに捉えており、事前アンケートには「たくさん伝え合うとよい」「よく聴いて反応することが大切」などの意見が多く寄せられた。

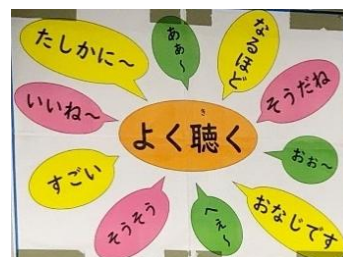


図12 学級掲示資料

授業中は、児童の反応に応じて「〇〇さんの考えに似た人はいる?」「それに反対の意見もあるかな?」などの問いかけや助言を行い、対話の広がり支援した。また、児童らで対話が進められるように進行カードも活用した(図13)。児童の行動や言葉に丁寧に反応することで自分の意見を伝えやすい環境づくりに努めた。

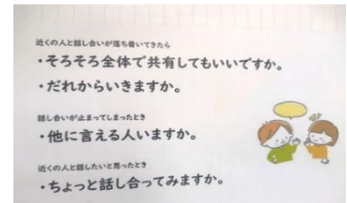


図13 児童用対話進行カード

これらの取り組みを通して、児童が互いの意見を受け止め、他者とよりよく生きようとする姿が育まれていた。児童の主體的な対話を促すためには、教師の柔軟なファシリテーションと明確な指導観が不可欠であり、児童が自覚するための意識付けが大切であると感じた。

5 自分軸を育てている姿 ～振り返りより～

授業のまとめとして、他者との対話を通して得た気づきを基に、自分自身の考え・感情・経験に立ち返りながら、問い直しや見直しを行う時間を設けた。児童は、授業で学んだことと自身のこれまでの経験を結びつけ、自らの言葉で振り返りを記述していた。

Cさん

今日の学習で大切だと思ったことは、生活をふりかえることです。なぜなら、本当にほしいものなのかよく考えることで、自分のすきがるかと思ったり、なで、まみさんが、服を何度もか、てもら。ていたのは、自分の好きでなくて、みんながか。ていたからだと思ひました。これからは、自分の生活を見直して、なりたいと思ひました。

【考察】振り返りで自己を見つめる時間を確保できたことで、自分自身と向き合い、自分の今を見つめる時間になっている。学んだ道徳的諸価値を基に、「自分はどうか」を深く考えることができている。

Dさん

今日わたしは今までよりも、と分かったことは、「まゆみ」のように「ほしい」という気持ちをコントロールできなかったり、せいで全部ほしかったりすると大人になってもその気持ちを伝えられないで周りの人から信用されなくなってしまうこと。だから、「ほしい」ということは悪いことじゃないけれど、かまふすることは大切だ、と思いました。

【考察】自分一人の考えだけでなく、児童同士の意見交換を踏まえて思考し、考えを広げている。人間理解をしながらも自分だけでなく他者との関わり、人間としてよりよく生きる上で大切なことについて自分の思いを書き留めている。

上記の振り返りから、自分の生活を見直そうとする姿や、他者との関わりを意識しながら、これからの生き方を想像し、その思いを丁寧に書き留める姿が見られた。児童の内面に根ざした学びが言語化されており、自分なりの価値判断や行動の指針を見だし自分軸を育む児童の姿が見られた(図14)。



図14 授業の終盤、振り返りノートに自分の思いや考えを綴っている様子

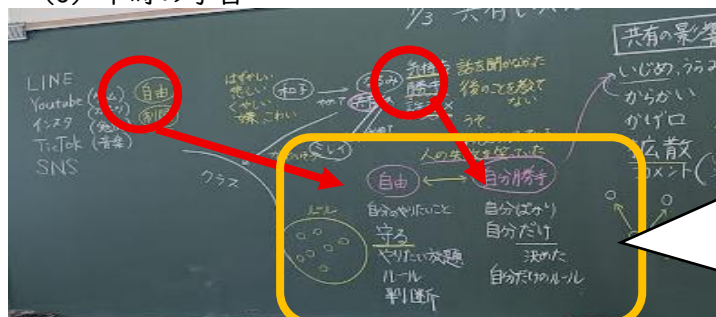
VII 検証授業

I 検証授業Ⅱ 対象：5年2組

(1) 主題名「責任ある行動とは」【A 自由と責任】

(2) 教材名「共有しちゃえ」(「新編 新しい道徳5」東京書籍)

(3) 本時の学習



○導入での対話や教材範読後の感想交流の中で児童から出た言葉を使い、道徳的価値に迫る発問とし、対話へと促した。

○自由と自分勝手の違いについて、本時の中で明確な区別をすることはできなかったが、対話を通して「自由」は自分勝手とは違うということに気付いていた。

(4) 授業の反省

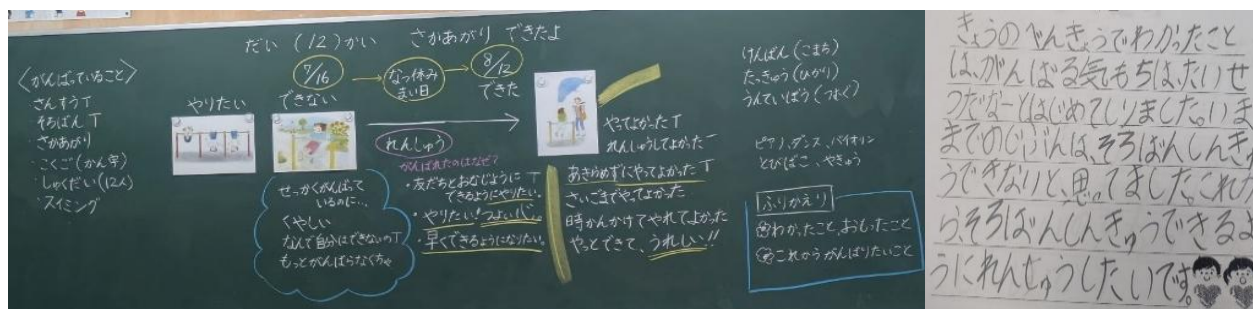
- ・児童の発言をつなげて発問を組み立てることができたことからファシリテーターとしての役割を果たすことができていたと思う。
- ・時間が足りず自由と自分勝手の違いが明確にならないまま、次の展開にうつってしまった。しかし、児童が多面的・多角的に思考し対話しようとする場面であったため、発問構成としては適当であった。

2 検証授業Ⅲ 対象：2年1組、2組、3組

(1) 主題名「やりぬくところ」【A 希望と勇気、努力と強い意志】

(2) 教材名「さかあがりできたよ」(「新編 新しい道徳2」東京書籍)

(3) 本時の学習



〈低学年授業の対話するポイント〉

○挿絵を活用して場面整理と心情理解を促す。

○自分の生活につながる物語も多い。自分のことを話せることが楽しい時期なので、実生活とリンクさせたり書けなくても自分の口で言える場面を作っていけたりするとよい。

(4) 授業の反省

- ・低学年の児童らは、挿絵など視覚的ツールを活用することで教材への理解が深まり、気付きから対話につなげることができていることが分かった。
- ・発達段階により自分の思いを十分に伝えることが難しい児童が多かった。そのため教師がファシリテーターとして児童の言葉を補ったり言い回したりすることが必要だと実感した。
- ・振り返りで自分なりに納得する生き方や人生を生み出そうとしているところから、自分軸が育まれているといえる。

VIII 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 自己や他者との対話を行うことで、多様な価値観に触れながら思考を広げ、他者とよりよく生きようとする児童の姿を見ることができた。
- (2) 他者との対話を踏まえ、自分自身と向き合う振り返りを行うことで、自分自身を見つめ直して考え、未来をよりよく生きようとする各々の自分軸を育むことができた。
- (3) 教師がファシリテーターとなり「伴走者」として関わることで、児童の言葉から発問を構成し、対話し思考を深める児童主体の授業にすることができた。

2 課題

- (1) 教材と生活との結びつきを意識して授業を構想し、実態を想起させる言葉かけや補助的な問いの工夫が今後の課題である。
- (2) 児童の思考は目には見えず、見取りが難しいと感じた。児童の想いを言語化するため語彙力を高める活動や児童の頑張りを評価する機会を工夫するなど他教科と連動して取り組む必要があると感じた。

IX 今後の展望

児童アンケートでは、「対話が好きになった」「楽しかった」と答える児童が多く、対話を中心に据えた授業が児童にとって有意義な時間となっていたことが明らかになった。実践を通して、高学年で価値を深めることの難しさや発問構成の重要性を強く実感した一方で、児童が対話を通して、本気で語り合う姿に確かな成長と希望を感じた。

今後も授業者として、発達段階を踏まえた明確な指導観のもと、児童の言葉に寄り添いながら、柔軟にファシリテートしていきたい。そして、より具体的な場面を想起させるような言葉かけで自分自身を見つめ直し、他者と語り合うことの中から児童が「自分の未来」を思い描けるような道徳科の授業を実現していきたい。

〈主な参考文献〉

1. 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』 東洋館出版社 2018 年
2. 永田繁雄 「『自分さがし』を後押しする『自分軸』を育てる」 『道徳教育』 明治図書 2025 年
3. 浅見哲也 『こだわりの道徳授業レシピ』 東洋館出版社 2020 年
4. 和井内良樹 「子供が考えたくなる発問を！」 『道徳教育』 明治図書出版 2025 年
5. 山田貞二 「『読み取り』から『自我関与』への展開を意識する」 『道徳教育』 明治図書出版 2025 年
6. 堀公俊 「本気の話し合い」 『道徳教育』 明治図書出版 2022 年

本検証授業研究会の記録

本検証授業実施期日：令和7年6月26日（木）

検証の視点

- ①多様な思考に触れる対話になっていたか
- ②自分事や価値についての思考を深める発問構成になっていたか
- ③児童の考えを引き出しつなげるファシリテーションができていたか
- ④振り返りの時間で自分軸を育むことができたか、その様子が文言から見取れるか

I 研究協議

【授業者より】

- ・学校として取り組んでいる「よく聴く」ことを意識し、話し合うことにも意欲的に取り組むことができたと思う。今日は導入や場面整理を時間かけずにできた。振り返りでは自分自身と向き合う時間（書く時間を優先）を大切にしたいため、共有は今回省いた。

【参加者より】

- ・児童の発言から授業を成り立たせていた。
- ・45分間、無理なくゆったり授業を進められていた。自己と向き合う時間が十分とれていた。「今日疲れた～。いっぱい（深く）考えた～」の発言があり、たくさん思考したのだと思う。
- ・土台が作られていると授業が進んでいく。児童に進行の紙を渡すだけで自分たちだけでどんどん進めていける。3人の話し合いでもファシリテーターがいた。
- ・「ほしいんだからいいんじゃない？」の発言をする児童もいた。そこを拾って、問い返しにつなげてよかったのではないかと。※引き取ってしまった。

2 講評

八重瀬町立東風平小学校教頭 仲座千恵子

- 子どもたちが安心して意見を述べ合っていることは大変素晴らしい成果です。これは、先進校の視察で得られた「聴く」指導や座席配置の工夫を積極的に取り入れ、話しやすい雰囲気作りに尽力されてきた証に他なりません。このような環境は、子どもたちが安心して自己表現できるだけでなく、他者の意見を受け入れ、自身の考えを深める上でも極めて重要です。
- 本研究で目指す「ファシリテーション」は、単に児童の考えを繋げるだけでなく、多様な価値観について多角的に考察し、引き出し、思考を深めることを目的としています。そのため、教師の応答力が鍵となります。本授業における教師の介入は、最小限でありながらも要点を押さえたものであり、児童の思考を深めるファシリテーションとして機能していました。
- 対話を生み出し、思考を深めるためには、発問構成が明確でなければなりません。本授業では、
①場面整理の発問（感想交流）、②基本発問（物欲の価値の表出）、③中心発問（多面的思考）、
④基本発問（生活への振り返り）という、一貫した構成がとられていました。成果と今後の展望を提示します。

【成果】節度・節制の価値観は具体的には①欲望の制御②感情の抑制③時間・資源の有効活用④適度な行動のような側面に表れます。主人公を批評するだけでは、物欲の制御という一面的な思考に留まりがちですが、教師の意図的な問いかけにより多面的思考へアプローチできた授業でした。

【今後の展望】授業の終盤では、児童が学んだことを自分の生活に落とし込み、今後の行動に生かせるよう促す必要があります。そのため、より具体的な場面を想起させるような言葉かけをすることで、児童の思考を自身の生活へと結びつけることができたでしょう。